

千葉敬愛学園創立 00周年記念事業
歴史シリーズ講演会II 講演録

房総戦国時代の終焉と秀吉・家康 —千葉氏・里見氏・房総諸氏の運命は—

令和7年11月15日

敬愛大学



千葉敬愛学園創立 100 周年記念事業
歴史シリーズ講演会 II
 主催：敬愛大学 後援：千葉県教育委員会 / 千葉市 / 千葉市教育委員会 / 里見氏研究会
 参加費 無料

令和 7 年
11月15日 土 13:00 (12:30 受付開始)
 敬愛大学 2号館 2202 教室 他

募集期間
 令和 7 年 10 月 1 日 (水) ~ 25 日 (土)
 定員
 350 名 ※ 応募多数の場合は抽選となります。

応募方法
 ① Web ② 往復はがき
 上記いずれかよりお申し込みください。
 (詳細は裏面へ)

アクセス
 会場には駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。
 JR 稲毛駅より徒歩 15 分、または東口正面山王町方面行きバスで「敬愛学園」下車
 千葉都市モノレール 六川駅より徒歩 12 分
 Google Map

第 I 部
 講演①「小田原合戦と房総」 黒田 基樹氏 (駿河台大学教授)
 講演②「豊臣政権と房総」 柴 裕之氏 (東洋大学・駒沢大学非常勤講師)

第 II 部
 座談会「NHK 大河ドラマを語ろう」
 パネラー 黒田 基樹氏：大河ドラマ「豊臣兄弟！」(2026 年予定)、「真田丸」(2016 年) 時代考証担当
 パネラー 柴 裕之氏：大河ドラマ「豊臣兄弟！」(2026 年予定)、「どうする家康」(2023 年) 時代考証担当
 コーディネーター 滝川 恒昭 (本学経済学部特任教授)

お問い合わせ 〒263-8588 千葉市稲毛区穴川 1-5-21 Tel: 043-251-6363

目次

開催にあたって (中山 幸夫 敬愛大学・敬愛短期大学学長) 2

第一部
 小田原合戦と房総 黒田 基樹氏 (駿河台大学教授) 4

豊臣政権と房総 柴 浩之氏 (東洋大学・駒沢大学非常勤講師) 14

第二部
 NHK 大河ドラマを語ろう 24

コーディネーター 滝川 恒昭 (敬愛大学経済学部教授) 35

閉会あいさつ (成松 恭平 敬愛大学副学長) 35



開催にあたり

中山 幸夫（敬愛大学・敬愛短期大学学長）



皆様こんにちは。紹介がありました敬愛大学学長の中山でございます。

本日は、週末の大変お忙しいなか、本学園の100周年記念事業、歴史シリーズ講演会においでいただきまして、誠にありがとうございます。三百五十人という定員でしたが、それを超える五百人以上の応募をいただいたということでございます。この会場には入りきらなくて、新館の六階のほうにライブ配信の会場をふた会場設けて、そちらのほうにお入りいただいた方々もいらっしゃいます。今、この画面のほうをご覧になっているかと思っております。大変多くの皆様にご参加をいただきまして、深く感謝を申し上げます。

私どもの千葉敬愛学園は現在、大学、敬愛大学、敬愛短期大学と、そして、あとは四街道に千葉敬愛高等学校がございます。また同じキャンパスのなかに敬愛学園高等学校がございます。また短期大学の附属の幼稚園が同じ稲毛区内にございまして、美浜区になりますですね。失礼しました。そういったことで、総合学園として発展をしまして、来年二〇二六年、令和八年には、学園創立100周年を迎えようとしております。百年という、その期間に様々なことがございました。紆余曲折がございましたけれども、建学の精神、敬愛愛人のもとに教職員が結束しまして、また地域の方々、多くの関係者の皆様のご支援と激励をいただきながら、百年という大きな節目を迎えようとしていることは、学園の関係者にとりまして大変、大きな喜びでありまして、また皆様に深く、この場をお借りしまして感謝を申し上げます。

学園創立100周年を迎えるにあたりまして、様々な取り組みを行ってまいりましたけれども、そのひとつが、この稲毛キャンパスの整備計画の進行でございます。昨年二月に、この建物の隣になりますけれども、新しい教育と新一号館が竣工となりました。教育環境の整備を進めることができたように思います。また既存の施設についても、改築・改修等の工事を行うことで、キャンパスの美化・教育環境の充実を図っているところでございます。このような

かで、来年学園創立100周年を迎えますが、実は来年は、奇しくも本学の立地する拠点でもございます。千葉市の開府九百年と重なるということでございまして、九百年と百年では時間のスパンがかなり違いますけれども、共に長きにわたり存続してきたということで、本学園では、創立100周年と千葉市の開府九百年、これを共に祝いする形で、周年事業のひとつとして、この歴史シリーズ講演会を昨年から開催しております。本学経済学部の滝川恒昭教授が、コーディネーターとして入っております。

昨年は、平安時代の末期から戦国時代まで、現在の千葉県北部を支配した名門の武家であった千葉氏研究の最前線、これをテーマに、基調講演と二つの発表報告をいただきました。本年は第二弾としまして、房総戦国時代の終焉と秀吉、家康というメインテーマで、二つの講演と座談会が行われることになっております。駿河台大学教授の黒田先生、そして東洋大学の芝先生に、専門家の方にお越しをいただいております。新たな学びと気付き、示唆に富む有益なお話を拝聴できますことを、皆様と共に楽しみたいと思っております。

なお、今回の歴史シリーズ講演会につきましても、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、そして里見氏研究会の後援をいただきました。関係機関の皆様には、深く感謝を申し上げます。参加いただいた皆様には、最後までお付き合いくださることをお願い申し上げます。簡単ではありますが開会の挨拶とさせていただきます。

小田原合戦と房総

黒田基樹氏（駿河台大学教授）



皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました黒田です。

今日は「小田原合戦と房総」という話題でお話をさせていただきます。この企画への依頼、八月です。演題が決まったのが八月。それで九月にはレジュメを出せと、いうふうに言われて、小田原合戦関係でということ、それで九月ぐらいにはレジュメを作ったんですが、そのあと、今回十一月なので、大体一カ月前ぐらいにレジュメは作ればいかなというふうに、そういう計算で普段は動いているんですけども、ちょっとね十月から異常に忙しくなっちゃって、今はそうした講演のレジュメを作るとかそれから雑誌、商業雑誌に書く文章を書くとかっていうのが基本止まっている状態です。昨日はNHKの大河ドラマの考証会議があつて、その前々日ぐらいには講演があつて、土曜日にも日曜日にも講演があつて、というような形でもうほとんど休みのない状態で、今日もへろへろで来ました。

大とも言っていないかと思うんですが、小田原北条家を滅亡させる、羽柴秀吉が小田原北条家を滅亡させる合戦というものになります。小田原合戦の際に、奥羽の大名も秀吉に服属したということで、その小田原合戦の終結というのが基本的に秀吉による列島統一、天下一統と呼ばれる事態をもたらした。戦国最後の合戦というふうに言っているものになります。北条家としては、羽柴方、羽柴家によって滅亡させられたという、そういう合戦になるわけなんですが、この小田原合戦、勃発直前の段階でいうと、千葉県域の北部を領国にしていた千葉家というのは、北条家に従属していて、当主の直重っていうのは北条氏政の子ども、当主の氏直の弟にあたる人間ですので、北条家の一門として存在していました。南部を統治していた里見家というのは、北条家と同盟関係を結んでいましたので、勃発直前においては、房総地域、千葉県域というのは全て北条方だった、という状況になります。そのなかで小田原合戦が勃発すると、その同盟関係にあった里見家が羽柴方に寝返って、北条方への攻撃を開始していく、というようなことが起きてくることになります。まずは小田原合戦時の房総の大名、国衆というのはどういう状況だったのかというのを整理しておきたいと思いますが、後ろの地図と合わせて見ていただきたいのですが。小田原合戦に先立って、羽柴方では、北条方の戦力調査っていうのをやっています。ここで戦房っていうふうに書いてあるのは、『戦国遺文房総編』の資料番号。『戦国遺文房総編』は『千葉県の歴史』の編纂が終わったあとに、滝川さんなどとともに編集した資料集になりますが、その資料番号を書いてあります。このとき、羽柴方が調査した資料というのは三通残っています。微妙に内容が異なっているんですが、それをまとめて示したものがこの部分ということになります。城主名なんか必ずしも、正確に表記されていないので、実際の名前にあたるものをそのあとパーレン括弧で示してあります。それから軍事動員数ですね、戦力ですね。それが表記されていて、ここまで調査をしているっていうところが、なかなか、戦争を始める前にはそうした敵方の戦力もきっちり羽柴

ただこれだけ盛大な会になつてるといふことで、気合を入れてお話をしたいというふうには思うんですが、小田原合戦と房総っていうことに関して、この内容でお話すること自体は私は初めてになるんですが、なのでいろいろと私の話を聞いていただいている方にとっては、非常に新鮮な内容になるのではないかと思います。ただ内容そのものについては以前、千葉県の歴史の編纂であったりとか、それからそれをもとに通史編を小田原合戦のところを書きましたので、そういったところをもとにお話をしていくことになるんですが、ただ後ろの何ページ目、三ページ目に関連拙著っていうのを二冊挙げておきました。下のほうにあるのがその『千葉県の歴史』の通史編に書いたものを一冊に、それを含めて一冊にまとめた、『戦国の房総と北条氏』っていうのが出たんですが、それは『千葉県の歴史』が刊行されたあと、の刊行になるので、それが二〇〇八年なのでもう十年以上前、そのあと小田原合戦そのものについて書いたものが『小田原合戦と北条氏』というものになります。これが二〇一三年ということ、これももう十二年前というものになります。基本的には今回改めて資料をもとに整理しましたけれども、基本的には新しい資料がそのあいだ出ているわけではないので、そこで書いたものを改めてまとめ直したということになります。小田原合戦時、房総地域がどういう状況だったのかっていうのを簡単にお話していきたいというふうに思います。

四ページ目は地図が入っていますが、下総、上総、安房三カ国のほとんどが千葉県域ということになります。下総の北部は古河公方足利家の領国です。で、この話には関わってきませんが、そのときは北条方として存在していました。いわゆる千葉県域が対象になるんですが、千葉県域の北部は千葉家の領国、南部が里見家の領国というのが基本的なあり方になります。話のなかで、地名とか出てきますけれども、地名についてはこの地図をご覧いただければというふうに思います。では、本題に入っていきたいと思いますが、小田原合戦というのが天正十八年、一五九〇年に起きますけれども、これが東国最大の、日本最方っていうのは調査していたんだというふうなことがわかります。ちなみに、騎っていうふうに書いてあるのは、これはこの当時、正規兵の表現、正規兵というのは馬上なので、軍役、大名、国衆の家臣で軍役を負担するのはすべて馬の上なので、それで騎っていうふうな表現をされますが、通常は人で表現されるものになります。これは正規兵の人数なので、実際の軍勢数は、その荷物持ちとか、そういうのがつきますので、四、五倍にはなつてくるわけですが、そのような形で表記されているということになります。千葉、原、高城、国分、鐺木、井田、というあたりが千葉家の勢力ということになります。そのあと出てくる豊島とか相馬っていうのは独立した国衆で、あと酒井、両酒井、それから長南武田、万喜の土岐っていう、それぞれ独立した、千葉家からは独立した国衆たちが存在しています。そのあとに里見家の戦力も記載されていて、ひとつの資料には里見ヨシハル、上総の南部から安房一帯は里見家の領国だったんですが、重要拠点は九カ所というふうな挙げられていて、左側の九カ所が挙げられています。別の資料には右側のほうに挙げた三つの城も挙げられていて、そうすると、ひとつの資料では九カ所だったので、全体的には十二カ所ぐらいの拠点、城郭が存在していたというふうなことがわかるかと思いますが、里見の全兵力は三千騎って書いてあるんですね。千葉家の本家、当主の兵力も三千騎ということになると、羽柴方としては千葉と里見は同等の政治勢力、というふうな意識していたということがわかります。この軍勢数はあくまでも羽柴方の調査によるものなので、実際はどうだったのかっていうのは、またそれは別問題ということになります。大体、大名、国衆の領国の広さに応じて、当たり前なことなんですが、軍勢数が違っていると。なのでどれぐらいの政治的な規模だったのかっていうのが、こうした軍勢数からでも類推することができます。天正十八年になつて小田原合戦が勃発していきんですが、里見家は先ほど触れたように、それまで北条家と同盟を結んでいましたけれども、合戦にあつてはそこから、それと手切れをして、絶縁して羽柴方に応じていくとい

城を包囲して開城を待つというの、織田家臣時代からの基本戦略なので、それをそのまま行っている。むしろ山中城を一日で力詰めで落としてるっていうのが例外ということになります。秀吉本軍は、その早雲寺に陣取って、そのあと石垣山城を構築して、これが確か六月あたりに移るんじゃないかと思わんですが、ずっと包囲してるんですね。その一方で東海道軍の別動隊が編成されます。これ先手っていうふうに当時の資料に出てくるんですが、秀吉直臣の浅野長吉と木村一を大将とする別動隊二万人が編成されて、武蔵に向けて進軍されます。浅野、木村のほか、家康の家臣もそこに参加した軍勢、要するに家康の軍勢と浅野軍を主力にして編成された軍勢ということになります。翌日の二十七日には相模の玉縄城、武蔵の江戸城という北条家にとつての地域の重要拠点、これが簡単に開城して、降伏して、浅野たちに接収されています。玉縄城は別として、江戸城の主力軍はすべて小田原にいますので、残された兵数は少ないので、二万人というのは基本的には、一個の戦国大名の主力軍の軍勢に相当しますので、こんな軍勢に攻められたら普通は対応できないということですね。北条が関東の大部分を統治、勢力下において動員兵力五万ですから、それ以前の戦国大名は大体最大でも二万ぐらいのことなんです。それをこのとき浅野、木村は二万人ぐらいの、かつての戦国大名の全兵力に匹敵するような軍勢を率いていたということなので、このあと房総の諸城を攻めていくんですが、当然対応できないということですね。北条家も、それ以前に房総に進軍したことがありますけれども、二万もの大軍を率いていけるわけがないので、房総にとつてみれば初めての事態が展開していくということになります。秀吉はこの二十七日に浅野と木村に、江戸城を受け取り後は、武蔵の河越城に移って東山道軍と合流するようにという指示を出すんですね。河越城っていうのも武蔵における北条方の重要拠点、ところが浅野と木村は何を思ったのか、東に進軍してっちゃうんですね。下総、上総、常陸に進軍していくということになります。その一方で里見家が羽柴方に応じて北条領国への進軍を開始して

うつと議論の対象になっていて、さまざまな見解が出されているというものになるんですが。その大多喜衆に対してが、それがターゲットになっているので、大多喜衆の軍事行動っていうのが、秀吉の承認を得ていない勝手な行動と認識されたことによるのではないかといいふうに思います。秀吉は、配下の武将の軍事行動っていうのは全て指示した通りじゃないと気が済まないっていうんですかね、要するに勝手な行動を一切許さないという方針を取っているんです。里見家が北条方に軍事行動する際に、あらかじめ秀吉にそのことの了解を得なければいけなかったんでしょうが、それをどうも得ていなかったんじゃないか。なので、秀吉は、そういう判断をしたのではないかというふうに思います。これはもう、今後も議論が続けられていくことになると思いますが。里見義康は結局、秀吉の命令を受け入れて、五月下旬には小田原に参陣して、秀吉配下の大名としての存続を認められるということになります。東海道軍の別動隊、浅野、木村軍はどういう行動をとっていったかということなんです。四月二十九日に下総葛西領や武蔵の岩付領、五月一日、翌日の五月一日には、下総の関宿領。二日には下総の佐倉領に、禁制を出しています。禁制っていうのは、その現地の住民が進軍してくる大名から、略奪を受けるわけですね。略奪を受けた際に、それに武力抵抗をしても敵対認定はしないよっていう保証書になります。それは一年の年貢分に匹敵する金額を支払って交付してもらいますが、大きな村だと三百貫納めるんですが、これ三千万ですね。今で言うと。ですから、小さな村で百貫文一千万。だから一千万、二千万、三千万のお金を積んで、その進軍してくる軍勢が、略奪しに来てきたものに対して、武力で抵抗するための保証書、安全保証書っていうものが禁制になります。それはお金を払って禁制を出してもらうっていうことは、その進軍してくる大名に対して、政治勢力に対して味方になるっていうことを表明するものになります。味方地における略奪っていうのは禁止されているので、味方地になることでその略奪を回避する、そういうための安全保証書というものになります。これを浅野、木村は、進軍してい

います。これが四月上旬ですから、小田原城が羽柴方によって包囲されたことを見て、これはもう駄目だということでもいち早く羽柴家に応じた。羽柴方としての態度を明確にしたというふうに理解できると思いますが、そのときに同盟関係を結んでいた北条を裏切るわけですから、それなりの名目が必要だということ、里見家は、関東公方の一族、小弓公方の足利頼淳を庇護していたので、この人を鎌倉公方にするんだっていうようなことを名目にして、北条方への攻撃を開始します。四月七日には小金領に禁制が出されて、十三日には東京湾対岸の三浦半島に禁制が出されるということで、千葉家領国、それから北条家領国に対しての、軍事行動の姿勢というのが示されていたということになります。具体的には二十日になって、家老の大多喜正木時茂が外房地域に進軍していった、そこでは上総の成東領に禁制が出て、このあと、時茂は、東下総まで進軍して、国分胤政の居城を攻略するという形で、明確に北条方に対して軍事行動を展開しています。五月初めごろになって、里見家当主の義康は、秀吉から小田原参陣を命令されて、それを受諾して参陣していったというふうに考えられるのですが、それほど細かく動向がわかるほど資料が残っていないので、おそらくそのころに、参陣を受諾して、そのあと参陣していったというふうに考えられるのですが。ところがその後、五月十二日になって、大多喜正木時茂については参陣無用とされるんですね、秀吉から来なくていいと。当初、里見家に対しては、安房、上総二カ国安堵を約束していたんですが、上総については里見家に安堵しないっていう方針を、秀吉は取るようになります。里見側の上総衆については、上総から退去して、里見には安房しか安堵しないので、安房に移住するようにということが命じられるようになります。里見家の領国は、上総については、南半分全域がもう里見家の領国だったので、それ没収すると、そこに住んでいる里見家の家来たちは、みんな安房に移れというような命令が出されています。なんで、そういう命令を秀吉が出したのかっていうことについては、資料には明記されていないので、これはだからもうず

くと、先々でその保証書の発給を求められて、出していったということがわかります。実際に、浅野たちが、たとえば関宿とか、その日に関宿とか佐倉に行つたっていうわけではなくて、当然その進軍を想定した村人が事前に申請をしている、という状況ですね。実際に五月三日に、浅野たちは、五月三日には江戸城を出陣してるんですね。下総、上総に向かう。秀吉からは河越に行けって言われていたのに、何を思ったのか下総、上総に進軍していくと。五日に小金城、土気城、東金城を開城させて受け取っています。十日に白井城、十八日に佐倉城を受け取ったと考えられます。ここまでのところで、要するに下総、千葉家領国の主要な諸城を全て受け取っているというものになります。十二日に、秀吉から指示が出されてきて、浅野たちは、報告を行っているわけですが、こういうことをしましたっていう、それを受けて秀吉から改めて指示が出されてくるんですが、受け取った書状に対して、普請している、いふうに報告をしたんですね、浅野が。そういうことについては不要だと。城中に家さえなければ、城の破却は不要と。要するに、それまでの城の受け取りの手順通りに浅野はやっていたんですが、受け取った城について補修をしたりとか、ということをやった作業を行っていたんですが、そんな作業は必要ないというふう秀吉から怒られているというものになります。十九日になると、北条の領国は、徳川家康に与えられるようになって、秀吉方では取り決められていて、それが房総勢力に伝わるようになってます。なので、北条家は当然、滅亡して、北条家のあとには、その領国には徳川家康が入ってくるっていうことで、房総の領主たちは改めて徳川家康に、仕官するっていうことを考えていくということになります。二十日に、それまでに、浅野、木村は、安房境、常陸境まで進軍していた。要するに上総の南部まで進軍して、それから下総に関して言えば、常陸との境目まで進軍して、書状を受け取っていた。ところが、その行動が、またも秀吉から叱責される、ということになります。秀吉は、小屋のような端城に二万の軍勢を、無駄遣いしてそうした行動は、天下の手柄にはならないと言ってい

るんですね。要するに秀吉としては、二万の軍勢を預けているんだから、北条方の重要拠点を攻略しろと言っているんですが、要するにそれなりの在城衆が籠城しているような、特に、北武蔵のほうの八王子城とか、鉢形城とか、そういった城の攻略にあたれつていう命令を出していたんですが、要するに守備兵がほとんどいないような、小屋のような端城、ちよつとこれはひどい表現かなと思うんですが、秀吉は大坂城を作りますからね、それから見れば、もう房総にある城なんて小屋だつていうレベルなんじゃないか。そこに二万の軍勢を、投入すると言っているんですね。そうした端城を、いくら攻略したとしても、それはもう手柄にならないぞということですね。城の受け取りには上使に三百人、三百人の軍勢を添えて受け取ればいい。すぐに武蔵の鉢形城攻め、これは北条方にとって、北関東では最大の軍事拠点になりますので、それはまだ落ちていなかったたので、その攻略に加わってというふうな命令が出されていきます。浅野、木村は、すぐに武蔵に転進して、ちよつと秀吉の口調が相当怖かつたでしょうね。浅野、木村は、それまでの行動をやめて、すぐに武蔵に転進して、二十日から、武蔵岩付城攻めに取りかかっています。要するに二十日に出された秀吉の書状、多分、その日のうちに浅野のもとに届けられたと思うんですが、もうすぐに言うことを聞いて、武蔵に転進をしたということですね。浅野、木村はその過程で、香取社を初め、下総、上総の寺社などに対しての禁制を発給して、その上で、これは、当座の安堵になりますので、その上で秀吉による所領の保証、それを取りなしを行っています。そのような形で、浅野と木村は房総を去って、そのあとには秀吉から各寺社への、所領の安堵というものが秀吉によって行われていって、羽柴家の、羽柴政権の統治下に房総が入っていくということになります。あとは、東山道軍、ちよつとその浅野との対比でお話をすると、東山道軍の総大将は前田利家なんですが、前田利家も、秀吉から二度ほど、小田原の本陣まで呼び出されて、謹慎させられているんですね。要するに、それも秀吉の言う通りの行動をしなかつたということ。前田利家は、その鉢

ども、この人は戦後、家康が江戸に入部したときに、白井三万石を与えられていますけれども、いささか少ないんじゃないかという思いと、もうひとつ白井という地域がその戦功に値するものだったのか、そのへんのところをお聞きしたいと思います。」

黒田氏 「それについては、次の柴さんがきつとお話になってくれると思いますので、そこでお聞きなされるとよいのではないかと、思います。」

木下氏 「続いて質問、ほかにございますでしょうか。いかがでしょうか。後ろの方。そちらの。お願いします。所属と氏名、お願いいたします。」

タカハシ氏 「目黒区から来た、タカハシと申しますが、進軍の話、ずっとお伺いしてたんですけど、大体こういう軍隊というのは、一日にどのくらい進めるものなんじゃないか？」

黒田氏 「普通で四十キロ。急いで七十キロですね。移動するときには、武装してないので、そこまでの。だからフル武装すると四十キロなんじゃないですかね。全部、甲冑とか武器とか、いつでも使えるような状況にして、鉄砲だと、もう火縄に火をつけて、みたいなところは、延々と歩いてって四十キロじゃないですかね。」

タカハシ氏 「一日に何時間くらい歩くものなんですか？」

黒田氏 「一日に何時間歩けるんですかね。いやそれはもう、朝から、夜明けとともに進軍で、日没とともにお休みですから。一日中、まあ、日中ですよ。」

タカハシ氏 「ありがとうございます。」

木下氏 「一番後ろ、続いているんですかね。お願いします。所属と氏名をお願いいたします。」

アキモト氏 「貴重な話、ありがとうございます。千葉市から来ました、アキモトと申します。里見家の、進軍のことなんですけど、秀吉は自分の指示通りでないという話だったんですけども、里見家が北条

形とか忍とか、北武蔵にいます。在陣していたんですが、あとは上野とか、そこから小田原まで呼び出されて、数日謹慎、反省をして戻って、もう一回同じことやって、もう一回呼び出しを受けて謹慎。前田とか、浅野っていうのは、秀吉家臣のなかでは、武略に長けた者として、代表的な存在なんですが、そういった人々でも秀吉の言うことをちゃんと聞けない、勝手な行動をする。浅野は謹慎まではいっていませんが、前田ほどではないんですが、そのような状況を、前田、浅野にして、秀吉の眼鏡には完全には叶わない存在だった。これは何に話がついていくかというと、来年の大河ドラマの主人公の羽柴秀長ですが、秀長は、そうした秀吉の要求を全て見事に実現するという、一回ちよつと怒られることがあるんですが、基本的には、そうした前田とか浅野のような行動はしないで、全部秀吉の意向通りの成果を上げていくことで、前田、浅野ほど秀長には及ばなかつたというようなことを最後お伝えして、二部に繋げていければと思います。

以上で私の話は終わりにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

—— 質疑応答 ——

木下氏 「黒田先生、ありがとうございました。それでは質問を受け付けたいと思います。所属と氏名を明らかにしていただきまして、ご質問をお願いいたします。ご質問のある方、挙手でお知らせいただければ、と思いますけれども、いかがでしょうか。後ろの。所属とお名前をお願いいたします。」

カワナミ氏 「市川市のカワナミと申します。このレジュメのなかに、徳川軍の先鋒、酒井家次とありますが、相当の武将かと思うんですけれど、

を裏切つて攻めていくつてことと、小弓公方を鎌倉につていうことも、この二つも秀吉は了承してたつていうことなんですか？どういうふうな、そのやりとりがあつたのかなつていうのは、知つてたら教えてください。」

黒田氏 「いや、その部分は資料に残っていないので、それはどうしてなのかつていうのが、研究者によつていろいろな意見が出されているつていうことになると思います。もし、それについてどうしても聞きたいつていうことであれば、第二部で、滝川さんに聞いていただければと思います。」

アキモト氏 「ありがとうございます。」

木下氏 「ほかにご質問、ございますでしょうか。いかがでしょうか。前のほう、お願いします。所属と氏名をお願いいたします。」

クガ氏 「千葉市から来ましたクガと申します。先ほど、先生がおっしゃった、豊臣秀長、一度、秀吉に怒られてるつていうことでしたけれども、そのことについて少し教えていただけますでしょうか？」

黒田氏 「九州攻めで、島津軍を退却させて島津義久が降伏してくるんですね。そうすると島津方の最前線の城を明け渡させるんですけど、秀吉は、攻略を命令していただから、勝手に開城させるつていうのは許せなつていうことを秀吉から言われて、とりあえず、そこで処罰をしてもしょうがないので、今回は見逃してやるけど、次やつたら絶対に処罰するつていうようなことを、言われていますので。開城させても怒られるんですよ。これは、怖いですよ。だから、浅野とか木村は、もう全然、こう、あさつての方向を攻め込んでるので、あとではすい怒られたと思うんですよ。つていうところですよ。」

クガ氏 「ありがとうございます。」

木下氏 「ほか、いかがでしょうか。所属と氏名をお願いいたします。」

ヨシムラ氏 「八千代市からまいりましたヨシムラと申します。貴重なご講演ありがとうございます。小田原包囲のときに水軍もあつたかと思うんですけども、水軍はどのような武将が率いて、どういう戦いが行われたのか、教えてください。お願いします。」

黒田氏 「どういう武将が率いてつたかのかについては、資料を見ればわかるんですが、それはもう四国の大名たちが中心だったと思いますけど、戦争らしい戦争はなかったと思うので、海上封鎖ということではないかと思えます。」

木下氏 「ほかにご質問ございますでしょうか。はい、どうぞ、前の方。所属と氏名を、お願いいたします。」

イトウ氏 「船橋からまいりました大学三年のイトウと申します。この一ページ目のこの国衆の構成について質問なんですけど、地図見ると銚子とかのほうに海上氏っていう、ウナカミ氏、国衆として見られると思うんですけど、この国衆、一ページの名簿には載ってなくて、これは勢力が小さすぎて、載せるに値しないほどの規模だったのかっていうのが、気になったので教えていただきたいです。」

黒田氏 「これはだから、羽柴方の情報なので、羽柴方に情報を提供した人の主観ではないでしょうか。海上はこのときはもう森山城なんかには確かいたと思うんですが。その調査の情報を提供した人は、書き載せる存在、書き載せるべき存在と思わなかったのか、独立した軍勢を編成していなかったのか、そういうような状況で、載せなかったっていうことじゃないかと思えます。」

イトウ氏 「ありがとうございます。」

木下氏 「ほかに、ご質問、ございますでしょうか。いかがでしょうか。どうぞ。所属と氏名をお願いいたします。」

トミツカ氏 「立正大学から来ました修士一年のトミツカと申します。今日は、講

演ありがとうございます。この地図に関してなんですけど、この地図って、結構、中世だとよく出てくるかなというところで、その江戸時代では、利根川だったり、掘削工事してたりして大体わかると思うんですが、この資料の出典といいますか、いつからこの中世はこの地図になったのかっていうのが、ご質問でひとつありまして。もうひとつ、進軍には、陸路と海路があると思うんですが、船であつたり、海路に関してなんですけど、海路だとその船が必要かなとちょっと思うんですが、その船はどこで調達してるのかっていうのがちょっと気になったので、ご回答よろしくお願いします。」

黒田氏 「まず、地図は、出典が千葉県の歴史別編年表というふうになっているので、その該当部分を見てください。で、進軍について。今回のその羽柴方の進軍は基本陸路なので、水軍が船で移動してますけれども、それ以外の場合、海路で進軍する場合、秀吉の場合だと四国攻めとかですけど、それはもう領国の浦々に船出させていうふう

木下氏

トダ氏

に言って、それで徴発して、使用料払うからって言って、一艘も残さず、隠さず、提供しろっていう。そういう命令で出されていますので、戦争始まると、だから周辺地域は漁業もできなくなるっていう、そういう状況に追い込まれるっていうことですね。」

「それではお時間もございますので、最後にいたします。はい、どうぞ。所属と氏名をお願いいたします。」

「千葉市のオオグロから来ました。トダと申します。今日は、貴重な講演ありがとうございます。小田原合戦において、秀吉の考えとして、最初からこの北条の領地を取り上げて家康に与えるつもりだったのか、それとも、北条がもう最初からほかの大名のように無条件降伏した場合、家康やはりどこかに転封したいとは思っていたと思うんですけど、そういった資料とかつてのは、残ってるんでしょうか？」

黒田氏

「秀吉が戦国大名を攻めて、滅ぼしたのは、北条だけなんです。やっぱりそれも、なんでかっていうのは、やっぱり政治状況からの検討によって、類推していくしかないんですけど。私としては、開戦数日で本拠を包囲された。本拠を包囲されるっていうのは、徹底抗戦っていうことですから。秀吉は、徹底抗戦した人はみな殺していうのをずうっと方針にしているので。北条が生き残る道としては、山中城を攻略される前に無条件降伏することしかなかったと思えます。で、家康の転封っていうのは、もう早い段階から、四月の段階からもう伊豆は家康に与えられて、五月にはもう北条領国、全部家康に与えるっていうふうになっているので。これは要するに、東側への取り次ぎを担っていた家康にさらに東の対応と、それからあともうひとつは、やっぱり戦場になっちゃったんで、北条領国が。で、五月っていうのは、秋作の作付け期なんです。だから、たぶんこの年は、ほとんど年貢が取れない状態になつてるので、なんだかんだつて言っても、開戦に至った責任は、取り次ぎをしていた家康にも一端の責任があるので、そうした北条への取り次ぎをしていたっていうことも含めて、あと始末をあなたやってねっていう。あとは、東への抑えっていうようなこと。だから、領国は倍増されているので、転封は大変だけれども、領国倍増してとんとんかなっていうような、そういう考え方じゃないかなと思えます。世間で言うような、家康が秀吉に対抗的な存在だったっていうのは、これはもう江戸幕府の作り上げた話になるので。実際は、家康っていうのは秀吉の親類、有力な親類、有能な親類っていうふうを考えられますので。そういう対立的な話ではなくて、秀吉政権を安定化させていくうえで、家康はどういう役割を果たすのかっていうなかで考えていくのが、的確ではないかなと思えます。」

豊臣政権と房総

柴浩之氏（東洋大学・駒澤大学 非常勤講師）



ただいまご紹介に預かりました、柴裕之です。過分なご紹介をいただいて、非常に緊張しておりますが、よろしくお願いたします。私もこの資料を九月初めに提出するようという話を受けて、そのころ非常にドタバタしていたこともあり、レジュメに少々誤植がありますが、お許しください。私の話は、先ほどの黒田さんのご講演の内容に続くもので、簡単に述べますと、豊臣政権のもとで房総はどのようなようになっていったのか？という話になります。それでは、これから見ていきたいと思います。

まず、先ほど黒田さんのご講演でもお話がありました、房総、すなわち下総・上総、そして安房という三カ国、そのほとんどが現在の千葉県域ですが、そのうちの北側が相模北条方、南側が安房里見方という勢力状況になっていたのですが、北条方の千葉氏などは、北条家の居城である相模小田原城（神奈川県小田原市）で守備に努めています。一方、里見義康は先ほどの黒田さんの

ような見方は、先ほどの黒田さんの講演でも述べられていましたが、江戸時代になってからいわれるようになったものです。では、どうしてなのかといえますと、家康は豊臣政権において関東と奥羽の担当者、特に軍事的な行動を任されていますので、家康が関東に移ったというのは、豊臣政権における関東・奥羽方面の担当者としての役割のうえにやってきたわけです。実際に徳川関東領国は、一般的に北条家の領国をそのまま継承したといわれています。しかし、徳川関東領国は、北条領国そのままではなく、豊臣政権によって編成がなされています。具体的に述べますと、上総国は本来北条家の領国として南部には勢力が及んでいません。それが、徳川家には一国として与えられています。その一方で北条家の領国は常陸国南部にまで展開していたのですけれども、それらの地域は徳川家には与えられていないという手が加えられています。それでは、なぜこのような編成がなされたのかというと、秀吉が徳川関東領国を、関東・奥羽に対する最前線の備えとして位置づけていたことによるわけです。

そのうえで注目してもらいたいのは、なぜ家康が江戸（東京都千代田区）に入ったかということ。これもよく、秀吉によって寒漁村であった江戸に追いやられたということがいわれますけれども、当時の江戸の政治・経済的な側面をみますと、関東領国の経営において重要な拠点地としてあったからです。しかも、これは家康が自身で決めたのではなく、二〇二三年に放映されたNHK大河ドラマ『どうする家康』でも描かれていましたが、秀吉の指示によるものです。秀吉はまだ関東がようやく平定させたばかり、そして奥羽、すなわち東北地方が豊臣政権のもとで情勢が安定していたわけではないので、何か事態が起きたときに対する備えて、江戸という地を重視していました。そのため、徳川家の関東、そして奥羽の抑えの重要拠点として江戸が選ばれたというのが実際のところであつたのではないのでしょうか。

このように、家康の権力基盤としてある徳川関東領国は、秀吉の後援を得ながら設立されたのです。その結果、家康は徳川関東領国を得て、二四〇万石

ご講演にもありました通り、豊臣方に応じて安房から三浦半島へ出兵しています。そのなか、羽柴家重臣の浅野長吉、木村一が率いる豊臣軍が、下総・上総両国へ侵攻しています。そして、浅野長吉と木村一の行動は秀吉の臨むものではなかったようですが、下総・上総両国を政権のもとに接収してしまうという事態が起きてしまいます。こうした房総情勢のなかで、里見家の領国であった上総国が豊臣政権によって没収されることになってしまいます。その背景には、ひとつは先ほど黒田さんも述べられていましたように、麾下にあった小田喜衆の問題かと思いますが、もうひとつはいま話をしました浅野たちが上総国を押えてしまったということが関係しているのかもしれない。このように、これから房総が豊臣政権のもとでどのようなようになってしまおうかといった状況にあるなか、徳川家康が関東へ配置されることが決まります。そして、下総・上総領国は、徳川家の関東における領国、私は「徳川関東領国」といつていますが、徳川関東領国に包摂され、安房国のみが里見家の領国となります。

さて、そのうえでみていきたいのは、それでは家康がなぜ関東に入国したのだろうかということ。このことは、そもそも豊臣政権において家康はどういう存在であったのだろうか？ということも関わってくるかと思えます。ここで押さえておいてもらいたいのは、家康は秀吉の義弟。つまり羽柴家親類の立場にあったということです。よく秀吉から恐れられていて関東に追いやられたといわれていますけれども、実は秀吉を支える義理の弟、羽柴家親類という立場にあった人物であったことに注目する必要があります。そのうえで、豊臣政権において家康がどのような働きを任されていたのかとみていきますと、家康は豊臣政権における関東・奥羽方面の外交と軍事、具体的に話すと、北条家の従属交渉、あるいは奥羽大名間の停戦実現を担当しています。そして小田原合戦が起きると、家康は豊臣軍の先陣を務めています。

では、なぜ関東に入ることになったのでしょうか？よくいわれるのは、先ほども述べましたが、秀吉が家康を恐れていたからだと思います。しかし、そのを領有する豊臣政権下における最有力領国大名（豊臣大名）となります。この二四〇万石なのですが、関東に移るまで、家康は駿河・遠江・三河、そして甲斐・信濃を合わせて、一二〇万石を領有していたという状況です。それが、いま二倍になったという状況です。この領知高は豊臣政権下の領国大名、いわゆる豊臣大名のもとではトップに位置するという状況ですが、これも、家康および徳川家の関東、そして奥羽の抑えという役割のもとでなされたものです。

そのうえで家康がいつ江戸に入ったかということを見ていきますと。一般的には八月一日といわれています。しかし、家康が江戸に入ったのは、実際には七月十七日から十八日にかけてのことであつたことがわかっています。では、どうして八月一日といわれたかということになるわけですが、秀吉が小田原合戦を終えた後、下野国宇都宮、現在の栃木県宇都宮市です、そこで宇都宮仕置、あるいは関東仕置といいますが、あの地域は誰が治めるか、誰をあそこに配置するかを決定し、今後の関東における統治の整備をおこないます。そのなかで八月一日は、常陸佐竹家らがその領国範囲が画定した時期なのです。つまり、八月一日というのは、秀吉によって関東の大名・小名の領国が画定しそれによって徳川関東領国の範囲が定まったというのが、この日だったのでないのでしょうか。つまり八月一日は、家康が江戸に入った日ではなく、徳川関東領国が豊臣政権による関東仕置で画定した日にちだったのでないのでしょうか。

そのうえでみていきたいのは、徳川関東領国に包摂された下総・上総両国はどのようなになったのか？ということ。下総・上総両国には、いろいろ徳川家の諸将が配置されたのですが、特に注目したいのは下総国では鳥居元忠、そして上総国では皆さんもご存知の方が多いかと思いますが、本多忠勝です。彼らがなぜ配置されたのかということを見ていくと、徳川関東領国において、下総と上総両国はどのような地域だったのかということがみえてきます。江戸時代になりますと、下総・上総両国は江戸幕府、徳川將軍家を支える政治・経済

このように、本多忠勝を上総国に遣わしてまでなすが目的であったのかといえます。徳川家による上総国領有の実現かと思えます。なぜ、そこまで上総国を重視するのかというと、徳川関東領国は基本的に南関東の武蔵・相模両国を中心に構成されています。つまり、江戸・東京湾に視点を置くと、武蔵・相模両国の対岸に位置した上総国はその領国の存立において非常に重要なところで、この上総国を徳川家の領有としてしっかり押えておく必要があるわけです。そして、上総国領有を確固としておくことは、徳川家だけのことではありません。秀吉は、徳川関東領国を北関東や奥羽で事態が起きた時の軍事行動に備えた最前線の領域として位置づけしていました。したがって、秀吉としても徳川関東領国の存立が確固であることを求め、上総国には徳川家においてそれなりの人物に入ってもらわなければ困るわけです。そのなかで白羽の矢が立ったのが、本多忠勝であったということです。

その後、忠勝は里見家を一作に南部から撤退させたうえで、万喜からそれまでの上総南部部の拠点であった小田喜改め大多喜へと移り、改修工事で築き上げた大多喜城を居城に管轄地域（大多喜領）の統治をおこなっていくことになりました。それに伴い、忠勝にとつて、これがそれまでの人生において大きな画期だったらくて、花押がそれ以前と以降で大きく変わっていきます。これ以降も若干の変化はありますが、大多喜に入ってから使用を始めた花押型をベースにしています。このように、忠勝本人においても、上総国大多喜に配置され、統治を任されたということが、彼の人生に於いて重要な出来事であったのです。

こうして徳川家による上総国の領有が確固となったわけですから、当然、江戸・東京湾の備えもしっかりしておかなければなりません。そのなかで、上総国の西側地域では、形原松平家といった関東東部前の五カ国領有時代から徳川家の水軍として活動をしているのですが、彼ら水軍衆が配置されています。このように、上総国は徳川関東領国の確固化、特に江戸・東京湾の掌握というところに（もちろん、このほか東総地域の重要性もありますが）ということにその命令を受け軍事行動に従事し、豊臣政権に反発する一揆が起きた陸奥国へ出陣、また壬辰戦争の際には肥前国名護屋（佐賀県唐津市）に参陣しています。その間に、豊臣政権下の領国大名、すなわち豊臣大名として秀吉から羽柴苗字と従四位下侍従という官位を得て、政権のもとでは「羽柴安房侍従義康」と名乗っています。そして、壬辰戦争の講和交渉に伴い、東国の大名が肥前国名護屋から戻ると、今度は秀吉の政庁である山城伏見城の築城工事に従事するという豊臣政権下の日々を過ごしています。

この状況は、戦国時代とは領国経営のあり方に変化をもたらすこととなります。戦国時代、大名は統治者として自身が采配し内政や外交・軍事を進めていかなければならず、領国にいるというのが当たり前の状況であったわけですが、ところが、豊臣大名は政権の保護を得て活動している立場ですので、政権への奉公のために京都・伏見、大坂に行き滞在しなければなりません。そのため里見義康は、先に述べました肥前国名護屋での対陣に続き、ほとんど領国にいないという状況です。この状況は、里見義康だけでなく、徳川家康も同様で、家康が徳川関東領国にいたのは秀吉が亡くなるまでの間で、ほんの二、三年という状況で、これが豊臣大名としての現状でした。

その状況のなかで、京都・伏見や大坂で滞在し活動するということはどうなるか。いろいろ大名同士や公家・商人らとの付き合い、つまり交流や接待、また領国の方でも、戦争状況が終わったなかで、復興さらには発展のために経営を進めていかなければならず、それに伴う費用の負担が嵩んでいってしまします。この事態は、三分の一と領国が縮減してしまつた里見家にとって存立に深刻な事態をおよぼすようになっていったのは、皆さんもおわかりいただけるかと思えます。このうえに、さらに文禄年間、一五九〇年代になりますと、関東では飢饉が起きています。そういった状況が続く、領国が疲弊し、里見家の存続が危ぶまれる状況へとなっていってしまいます。この事態に、豊臣政権はどう対応するのか。秀吉は一門や譜代に委ねた領国ですと、もともととは自分がそ

地域の特徴があるのではないかと思えますが、その目的をもとで地域が展開しているということがみえてくるのではないのでしょうか。

このように下総国は北関東や奥羽に対する東の軍事的備え、上総国は江戸・東京湾の掌握などの目的のもとに、徳川関東領国では地域の展開がみられたということとなります。これらの地域の日常的な経営については、それぞれの管轄を委ねられた諸将に任されていて、家康は彼らを束ねることで徳川関東領国を治め、豊臣政権下における最大の大名として飛躍していきます。家康といえますと、秀吉のライバルで警戒されていた人物というふうに見る方が多いかもしれませんが、しかし、この時期に家康が飛躍するのは、豊臣政権の後援を得てなされたというのがというのが実際のところですが、秀吉が家康を警戒していたといった、江戸時代以来の徳川史観に基づいた歴史像は、見直す必要があります。そして、そのうえで下総・上総両国は、徳川家にとつて先ほど述べた政治的・軍事的な地域としてあったということを確認しておいてもらえればと思います。

最後に安房国についてみていきます。小田原合戦後の豊臣政権による関東仕置で、里見義康は安房一國のみを領有することになります。しかし、その領国規模はそれまでの三分の一に縮減してしまっていました。それに伴い、経営も困難になり、里見家の存続が危ぶまれる状況となっていました。当然、この事態は大名家との政治関係のうえに豊臣政権もなっているわけですから、政権側も対応しないわけではありません。したがって、豊臣政権側も里見家の存続のために力を貸すこととなります。そのなかで豊臣政権側の里見家に対する政治的後見役、「指南」といいますが、活躍したのが、秀吉の側近奉行であった増田長盛です。増田長盛は、里見家の領国が三分の一となつてしまつた状況のなかで、その存続のために領国整備に携わることになります。

その一方、里見義康はどうしていたのかというと、豊臣政権への臣従を示すために、人質を差し出し、さらには秀吉の指示に従い上洛、その後は豊臣政権を統べる立場にありますので、自分から再建のために介入していきますが、もともと羽柴家の領国ではない、いわゆる外様大名の領国については基本的には経営を大名家に委ねていますので、介入しないという政治姿勢を原則としています。しかし、大名領国の深刻な財政難は、その大名家の存続だけでなく、豊臣政権自体にも影響が及ぶことにもなりますので、その場合には立て直しを図るために、増田長盛・石田三成ら側近奉行を派遣し、領国再建を図っています。外様大名の場合は、自分の方から領国再建を豊臣政権に願うことで対処がおこなわれるため、里見家側が増田長盛に領国再建への手助けを願つたところ、増田長盛が慶長二年（一五九二）にやってきて、税を賦課する基準を設けるために、地域の現状調査、すなわち領国検地を実施し、そのうえで改革を進めていっています。これによって、里見家は安房国で九万石を治める豊臣大名としての立場と、そして支配体制を維持していくということになります。

このように豊臣政権の大名領国における経営の介入は、大名家の存立危機となつた時におこなわれたのです。それでは、徳川関東領国では豊臣政権による介入がみられるかという点、経営が難なくいっていたのか、または家康がうまく事態を対処していたのか、介入の形跡はありません。そこに里見家と徳川家との差があるのかもしれない。

それでは、里見義康が京都・伏見や大坂に滞在するなかで、里見領国の政治運営はどのようななされていたのでしょうか。里見義康の指示を受けながら、義康の弟である正木時茂のもとで運営が進められていたようです。ただ、彼の史料があまりないので、以前に『図説戦国里見氏』（戎光祥出版、二〇二二年）を記した時は、時茂のもとでの政治運営を記しながらも、いまいちはっきりしたことをいことができず、歯がゆい思いを持っていました。ところが、羽柴秀長について研究をする機会があり、そのなかで大名当主というのは指示や最終的に認可をするわけなので史料が残りますが、政治運営に携わる人物たち、大名当主からの指示を受け実際に政務の指揮にあたる人物たち、特に当主の分

柴氏

「どのように先生はお考えでいますか？」

「はい、ご質問ありがとうございます。私は逆だと思っっているのです。つまり、佐竹家とかいった勢力に対する備えというのが、この東側の配置として見えています。そういった東、佐竹家とか奥羽への抑えですね。これが、この東側の配置に表れているのだらうなと思っっています。」

木下氏

「ありがとうございます。それでは、そちらの。」

ヒライ氏

「ご質問ありがとうございます。四街道のヒライと申します。この房総から関東の配置において、里見と佐竹の扱いに関する、秀吉と家康が当時どう思っっていたかというところをちょっとお聞きしたいと思うのですけれども。家康は、佐竹と里見が南北にることによって、両方への備えをしなければならぬことで、かなりちよつと苦労した配置をせざるを得ない状態になっていると思うのですね。徳川の政権になつてから里見は改易、佐竹は秋田へと、結局離れたところにやつてしまうのですけれども、このときにもう改易とか配置替えをするという選択肢もあつたような気がするのですが、秀吉の意向でここに残つていたのか？たとえば里見に羽柴の苗字を与えて、のちの朝鮮、唐攻めのほうに使うとか、まだ使い勝手がまだあると判断して残していたとか、そのへんの秀吉、家康の、この佐竹および里見に対する扱い、そこに相違があつたのか、時代によつて変わつてきたのか、そのへんのところもしわかつたら、教えてほしいのですが。」

柴氏

「ご質問ありがとうございます。基本的に秀吉は、大名を安堵するというのが当たりまえなので。自分に味方した大名を保護するということになります。したがつて、佐竹家や里見家というのは保護される。里見家は領国の規模がそれまでの三分の一になつてしましますけれども、保護されるというのが基本的なあり方です。ただそのあとに、

何かあつたとき、まだ里見家とか佐竹家、里見家の問題はたぶんな

いと思っのですけれども、佐竹家の場合は南奥にも繋がつていすので、そういったときの備えというのが必要なわけです。彼らと秀吉とのやりとりは古くからあるので、秀吉のもとで従つてからはそれほど年月を経ていない、ということはおわかりただけるかと思っますが、そういったなかで、抑え的存在が必要なのでは。それが家康だつたというふうに理解してもらえばよいかと思っいます。ですので、この時の家康は、秀吉の親類として動いていすから、先ほど黒田さんが仰つていたと思っますが、家康も秀吉と同じように非常に忠実なのですね。この時期の家康というのも。秀吉の意向を踏まえたうえで、しっかりと動いてる、そういう人間ですので、家康も秀吉が求めていることをやつたというふうに理解したほうがいいかと思っます。ありがとうございます。」

木下氏

「ほかにご質問。どうぞ。」

カサマツ氏

「千葉市から参りました、カサマツと申します。今日は、ご質問ありがとうございます。ちよつとベタな質問なのですが、家康がなんで江戸になつたのかと。先ほど秀吉の非常に意向が大きかつた。ただ、江戸は確かにそれなりの町だつたとは思っのですが、海という意味では、品川とか神奈川とか、ほかにもより有力なところはあつたし、内陸から考えても、忍とか川越とか、もうすでに城が発展していたようなところというのは、かなりあつたと思っんですが、そこを選ばずにあえて江戸にしたつていうのは、何か特別な、特に江戸の重要性みたいなのは、あとから振り返ると、いまから振り返るとそうかなと思っんですけど、当時どう見られていたかとか、ほかの今、挙げたようなところと比べて、江戸の重要性というのは、当時の秀吉なり家康なりが、どう認識していたかというのを教えて

柴氏

いただけると思います。」

「まずひとつは流通で、いま、おっしゃられた品川などを通じたうえでの流通の拠点、要するに水運と、あと陸上交通の結接点という立地にあること。さらに陸上交通で申しますと、北関東、さらには下総、上総ですね、要するに千葉方面、そういったところに繋がつていて、要するに、水運と陸運ですね。太平洋側の水運と、東北などに向かつていく陸運とかの交通とのちよつと結接点、というのが江戸にあるということが重要かと思っますし、実は江戸つていうのは、その前の北条家の時代からも重要視されていると場所です。そういった地域的な歩みを、秀吉や家康も理解していたのではないかと私は見えています。どうもありがとうございます。」

木下氏

「時間の関係でございますので、最後の質問とさせていただきますが、ご質問でございますでしょうか？よろしいでしょうか？それでは、柴先生ありがとうございます。」

柴氏

「ご質問ありがとうございます。」

木下氏

「ありがとうございます。それでは、ただいまより二十分間の休憩とさせていただきます。第二部用アンケートというのが冊子のなかに入つておりまして、そちらのほうを回収させていただきますと思っます。まだご記入お済みでない方は、この時間ご記入いただきまして、会場前方にいるスタッフ、ちよつと手を挙げていただけますか。籠を持つているスタッフがおりますので、そちらのほうにご提出をしていただきたいと思います。また、会場入口付近にて、関係書籍の販売も行っておりますので、そちらのほうもぜひご利用ください。再開は十五時半、十五時半を予定しております。それまでにご着席いただければと思っます。よろしくお願いたします。」

NHK大河ドラマを語ろう

パネラー

黒田基樹氏（駿河台大学教授）

柴浩之氏（東洋大学・駒澤大学非常勤講師）

コーディネーター

滝川恒昭（敬愛大学経済学部教授）



滝川氏

「それではこれから第二部へと入っていきますが、パネラーは第一部に引き続き黒田さん、柴さんと、コーディネーターとして本学経済学部の滝川が務めさせていただきます。よろしく申し上げます。」

柴氏

「お願いします。」

滝川氏

「これからレジュメの九、十ページ、それを参照してください。」

お二人はこれまで、黒田さんは『真田丸』、柴さんは『どうする家康』という番組の時代考証を手掛けています。また来年は『豊臣兄弟！』の時代考証を担当されるということ。そこで、大河ドラマの功罪について聞きます。大河ドラマに取り上げられたことで、今まであまり知らなかったことに光が当たったり、また研究がこれを機に進むといったことが挙げられる反面、明らかに史実とは違う面が語られたり強調されたりといった二面性があると思います。お二人はこの点どう考えますか？まず黒田さんからお願いします。取っていいです。」

黒田氏

「基本的には『功』しかないと思っていて。社会描写が違うとか史実と違うとかっていうのは、その史実が普及していないという研究者側の責任なので、そういう描写がされるっていうことはまだまだ研究者としてのアピールが不足しているっていうことで、もつと頑張んなきゃいけないっていうふうに研究者が思うべきところかなと。『功』は、その機会に今まで普及していなかった事柄が事実が普及していきますので。今回の『豊臣兄弟！』は異常で。すごいですよ、秀長に関する本。読む価値あるのは私たち二人の本だけで、あとまあ何人かいますけど。実際に史料に当たってないのに勢いで書いてる本っていうのが結構あるので、そういうのは絶対読まないでください。史料に基づいて書かれているものを読んでいただくのがいいと思うんですが。そうしたところでも、秀長についての本は今まで一冊もなかったの、ちゃんとした良質の本っていうのは。それが

もう何冊も出るっていうこと自体は非常に喜ばしいことで、これも大河ドラマじゃないと絶対に出ないですから、そういったところは非常にいいところだと思ってます。」

柴氏

「私も基本的には『功』しかないと思ってます。『罪』のほうは基本的にドラマですので、ないと思えますし。ドラマ側の人もドキュメンタリーを描いてるわけじゃないんだと、ドラマなんだということから、やっぱり私たちはそこで協力していますので。基本的にそういったところで、黒田さんが言いましたけれども、史実で違っていることっていうのはこちらがやっぱりまだアピールが足りないということだと思えます。『功』っていうのは、ものすごい今まで光が当たらなかった、たとえば秀長のような人物の研究が一気に進むことによって、今までと違う面が見えてきたということなどが挙げられるかと思えます。要するに弟の存在というのは分身的な存在って、ほかの研究でもわかっているんですけども、改めて見ていくというところがわかってくるんじゃないかな。そういう意味でも、今回のそういった秀長という人物に当たることによって、今までと違ったことがわかってきているという状況なので、『功』のほうが大きいと思えます。」

滝川氏

「わかりました。それでは一人ずつ聞いていきますけど、そもそも時代考証とはどんなことをするんですか？」

柴氏

「私が言いますと、基本的には台本が作られるまでのアドバイス、助言、証といいますが、基本的には台本が作られるまでのアドバイス、助言、そういったことですね。要するに、台本が作られるにあたって、まず上がってくるわけですけども、それが史実的に問題ないのかとか、そういった最初に検証がやっぱり必要なですね。要するに、先ほどドラマだというふうに言いましたけれども、じゃあまったく時代から

滝川氏

「そうですね、それに関連するんですけど、明らかに史実と違う面が描かれたり、そもそも史実とまったく関係のない話が盛り込まれようとしたとき、その脚本を見てどうしますか？というようなことが出てるんですけど。」



黒田氏

「基本はドラマなのでできるだけ史実ベースにっていうところ、制作側もそれを心がけてるんですが、ただドラマ展開としてどうしても必要なフィクションというのが出てくるんですけども、それを、できるだけ史実と整合する形で助言をしていくっていうところになります。実際に資料に残ってないところっていうのは、いくらでもフィクションしていいわけですけども、ただ時間的な前後関係でおかしいとか、こういう発想はしないとか、そういうことについては意見を言いますけれども、最終的にはドラマは演出、それから制作統括、プロデューサー、作家のものなので、どうしてもこのシーンを入れたいっていうたら、最低限可能な範囲でっていうところだよ。」

柴氏

「はい。」

黒田氏

「やっぱりドラマとして面白くないと元も子もないので。そういったところで裏設定を、我々結構裏設定を作っていくんです。なんかの質問が出てきたときに、昔はNHKの苦情は全部ハガキだったのでハードルが高かったんですが、今メールなので本当にくだららない抗議もしてくるんですけど、それにいちいち制作側は答えるんですが、そのときに、これはこういう状況を設定しての作劇だというような裏設定をして制作されています。」

滝川氏

「はい、ありがとうございます。続いて、先ほどアンケートをいただきましたが、ものすごくたくさん来てましてちょっと困りました。数人の方のしか紹介できないですけど、ちょっと紹介します。その一つ、戦国北条氏が大河ドラマの主役に早くなってもおかしくないと思うのですが、その理由はどうお考えですか？黒田さんですね。」

「まだなっていないということですよ。まだまだテレビ番組スタッフに北条の認知度が低いからということですね。なので、小田原を中心に署名活動をしてますけど、皆さんされてますか？家族、友達、

黒田氏

「はい。」

黒田氏

「はい。」

「ありがとうございます。続いて、先ほどアンケートを

滝川氏

みんなに署名をしてもらって、百万票いけば制作スタッフも、こんなに待望されてるんだっていうふうに思います。そうすると、一般的に普及する小説や漫画がいっぱい出ていかないと、北条の認知度は高まらないので、そうするとやっぱり関東を描かれますから、この千葉も北条が出てくれば出てくると思うので、そうすると署名をして人気を高めていくのが一番手っ取り早いかなと思ってます。」

柴氏

「はい。」

柴氏

「確かにそういうところもあるかと思うんですけども、その一方でまた違った視点も描かれているかと思えます。要するに、秀吉っていう存在が今まで描かれてきたと思うんですけど、今回秀吉という存在に当たることによって、今まで秀吉だけでは見えなかったこととか、そういった違ったものがわかってくるし。また先ほどの話にもなってくんですけども、秀吉の研究の進展によって、今まで秀吉がすべて動かしていたというようなことも、本当に秀吉の通りだけに動いているのか、まあ実際その通りに動いているんですけども、それはどのようになされているのかとかいろいろ研究によって見えてきています。そういったことが視点が違うことによって、ドラマでも描かれてくんじゃいけないかというふうに思っています。」

滝川氏

「はい、ありがとうございます。」

黒田氏

「はい。」

黒田氏

「はい。」

黒田氏

「やっぱり研究が進んでいくので、その前提になる設定がアップデートされていきますので、ぜひ『豊臣兄弟！』十二月十五日にならない

いと公式ガイドブックが発売されないので、あらずじというのはいと初めて明らかになってきます。それまでは何も言えないんですけど、秀吉とねねの結婚の時期がいつかな？とか、秀吉の家族と一緒に秀吉とねねになるのはいつかな？とか、そういうのを過去の大河ドラマと比べてみると、新しい見解がベースになっているっていうのがわかってると思います。そういうのをいくつも見つけていただいて。その元になってるのは私たちが書いた本なので、気になつたら本を読んでいただくというふうにしていただければと思います。」

滝川氏

なかでドラマも進んできてると思いますので、そういったことでももらえればなというふうに思います。」

「ありがとうございます。ここで皆様にご紹介しておきます。今日はNHK大河ドラマということで、スペシャルゲストを呼んでおります。この六月までNHK千葉放送局の局長として勤務しており、この七月からはNHK首都圏局副局長を務めておられる綱島浩三様、どうぞこちらに来てください。拍手をお願いします。」

綱島氏

「大丈夫です。すみません、NHKの綱島です。今、最初大河ドラマの功罪で、『罪』があつたらどうしようかと思つていたので、功罪でも『功』だけと言つていただいたので本当にありがたいことです。私はNHKの大河ドラマの担当でもございませぬし、ずっとそれをやってたわけではないので、ちょっと歴史のこともわかるわけではないんですけども、つい最近まで千葉放送局長をやつていました。滝川先生も含めて、千葉県でなとか大河ドラマ、もしくは朝の連続テレビ小説、このどちらかをやらなきゃいかんという命で千葉放送局長に赴任したんですが、赴任期間では実現せず、今、首都圏というところで関東甲信越を担当しています。大河ドラマ、朝の連続テレビ小説という千葉県、過去に一個だけあるんですけども、皆さんご存知でしょうか？えっ？そうです。さすがですね。ありがとうございます。」

「今日も戎光祥社がたくさん本持ってきてますんで。その前に里見氏の本を買っていただいて、そのついでに買うということをお願いいたします。」

黒田氏

「あと二冊ぐらいずつか残ってないので、早くお買い求めいただければと思います。」

滝川氏

「『どうする家康』で質問です。『どうする家康』で築山殿を定説と異なり、善人として表したが、ドラマとしては面白いけど史実としてはどうなのかと賛否両論あつたと思いますが、どうですか？」

柴氏

「実は築山殿は、要するに悪人と描かれているのはまず江戸時代でございまして、それをほじいたときどうなるかというのがたぶん『どうする家康』の視点です。また当時の女性のなかで築山殿をどう描くかということも確かやつたと思うんですね。あんまり評判が良くなかったですけど、築山殿が家康のいわゆる側室を選ぶときにオーディションみたいなことやってたと思うんですけども、あれが築山殿の元で行われているとか、ああいったことも実は研究成果の反映に実はなっているんです。そういった、本当に築山殿が悪人だったのかということについては、見直してみなければならぬという



せん。残念でならないんですけども。一応、私としても千葉局長として何個か提案したんですけども、全部ドラマサイドから駄目だと言われておりまして。このことは、今もありますけどもさつき話が あった通り、地域が盛り上がりたかないとなかなか達成しないというこ とです。私、名古屋とか大阪方面の勤務あるんですけども、たと えば静岡もあるんですが、静岡だと毎年のようにどっちかやってる んですよ。なんらかがあるということなので、ちょっと千葉愛も 強いんですけどもなかなかないので、ぜひ皆さんの力で千葉の話 題でドラマをやりたいと。経済効果もかなりありますので、ぜひお 願いしたいと思います。今日はそういう話しかできませんけどもよ ろしく願います。」

滝川氏 「それでは、ここで黒田さんと柴さんに聞きます。あなたが一番好き な大河ドラマは何ですか？あなたが関わったドラマを除いてくださ い、ということをお願いします。じゃあそこにクリップボードがあ りますので、」

黒田氏 「これに書くの？」

滝川氏 「書いてください。」

黒田氏 「一番好きな？」

柴氏 「好きな？」

黒田氏 「好きなね。難しいな。ひとつじゃないと駄目？」

柴氏 「関わったやつは駄目なんですよ？」

滝川氏 「それでは、私のほうからちょっと。ちなみに私は『国盗り物語』。」

黒田氏 「古い。」

滝川氏 「古いですね。五十年前ですよ。でもこれ、明智光秀の近藤正臣が 絶品でしたね。もうこれを知っている人は少ないと思いますが、こ れが一番です。それでは黒田さん。」

黒田氏 「『武田信玄』。」

滝川氏 「はい。」

「やっぱり大河ドラマ、戦国はもちろんですが、戦国だと信長、秀吉、 家康っていうのが中心になっちゃうんですけど。東国で主人公に最 初に、戦国ではね、『武田信玄』で。やっぱり中井さんの信玄の演技、 それから堤さんの義信の演技とか、三条殿の紺野美沙子さんの演技 とか非常に良かったので。信玄らしい信玄っていうのが初めて映像 化されたので一番好きですね。」

滝川氏 「じゃあ柴さん。」

「『徳川家康』です。なんで選んだかというと、いろいろあったん ですけど一番最初に見たというだけですね。単純に。一番最初に見た ものと言われて。あとですね、『どうする家康』のときに、一番最初 に見て一番最初に好きになったのはなんですか？って言われたから、 スタッフに言われたときに『徳川家康』って言ったら、え？やっぱ り運命なんですか、この時代考証はそういうことで運命で狙っ たんですよ、きつととか言われたぐらいですので、とりあえずそう いったこともあってここに書いたという次第です。」

滝川氏

「ということ、会場の皆さんからこの同じような質問を受けました。 そして集計が出たようなので、それをちょっと見てみたいと思いま す。あなたの一番好きな大河はなんですか？三位からいきます。第 三位『独眼竜政宗』ですね。」

黒田氏 「『まさ』の字、違うね。」

滝川氏 「ねえ。この『まさむね』違うね。政治の『政』。」

「お酒ですね、これじゃあね。でも『独眼竜政宗』ということ。で は第二位。見えちゃった。『真田丸』ですね。黒田さんどうですか？」

黒田氏

「私はもう最高の作品だと思っているので嬉しいですね。頑張りま す。」

黒田氏

「だからそのためには、滝川さんがちゃんと論文集を出す。これはも う大前提。」

滝川氏

「はい。なんとかします。これも会場の方からアンケートで取ってる んですが、ちょっとまだ見てないですけど違うんじゃないかなとい うふうに思います。それでは見てみましょう。『房総ゆかりの人（一族） 』で、大河ドラマにしたいのはい、第三位『千葉氏』ね。おお、千葉氏 ですね。」

網島氏 「九百年ですから。」

滝川氏 「あ、九百年ですね。どなたが入れたんですかね。なんか千葉氏。」

柴氏 「そのなかで誰を選ぶか。」

「第二位『伊能忠敬』。伊能忠敬ですね。そうですね。でも伊能忠敬 は地図ができたとき死んじゃってるんですよ、ご存じのように。 『大河への道』っていう映画がありましたけど。」

網島氏

「じゃあ第一位は『里見氏』なんですね。なんか組織票が入ったみた いで。この結果、網島さんどうですか？」

網島氏

「本多忠勝は入らないんですね。だ いたいのNHKのなかでも里見の、 本多、このへんでっていう話はあつ てですね。だいたいNHKの千葉 局にいます、里見さんのところは 館山市長と来たり、伊能さんのほ うは佐原や旭のほうから来たりと か。また本多忠勝のところは大多 喜町長が、陳情に年に二回ぐらい 大河ドラマにしてくれと。結構お

滝川氏

「ありがとうございます。」

滝川氏

「じゃあ第一位です。先ほどちらつと見ましたけど、第一位は『鎌倉 殿の十三人』ですね。これはやっぱりあれですね、千葉県もちょっと 関わってましたかね。上総広常がね。これはそうしますと、終わりに しましょう。じゃあ続いて、房総ゆかりの人物（一族）で大河ドラマ にしたいのはい、ということ、これも同じようにボードを使って。そ れでは私のほうから披露しましょう。『里見義堯』。あまり知ってる人 はいないようですね。」

網島氏 「拍手が小さいですね。」

滝川氏 「その場合にはこの本を、売ってまずんでね、買って読んでください。 それでは黒田さんから。」

黒田氏

『里見義堯』なんです、その前に滝川さんは今まで書いた論文を 全部論文集で出さないと実現できません。ほかの人が検証できない んで。一般書が一冊、二冊ぐらいあつただけではドラマ作りにはな かなか難しいので、早急に五冊ぐらいに一遍にまとめてください。」

滝川氏

「いや、なかなか本にするのは大変で。この本だけで一冊二十五年か かりました。黒田さんと一カ月に一冊。」

黒田氏

「いや、ちゃんと情報を仕入れる期間っていうのはありますけどね。」

滝川氏

「でも情報を仕入れても、やっぱり行ったり来たり行ったり来たりが あるんですよ。まあ置いときましょう。じゃあ、柴さん。」

柴氏 「私も『里見義堯』です。」

滝川氏 「おお。打ち合わせしたわけじゃないですよ、本当に。」

柴氏

「やっぱり里見家の代表的な人物っていうと、里見義堯かなと思いま すので、まあ里見義堯を中心に描いていただければなというふう に 思っています。」

滝川氏

「ありがとうございます。」



いいもの持ってきてくれるんです。でもなかなかドラマにならないという現状なので。何度も繰り返しなんですけど、地域が盛り上がっていただくていうことが一番大事なので、そのことを前提にドラマにしていっていいことが基本だっという話をずっと。ドラマの責任者とそこに陳情に渋谷にもみんなで行くんですけども。滝川先生も、里見さんのときは来ていただいたりしてらるんですが、やっぱり同じこと言うんで、地域が盛り上がって、ぜひっていう動きを出してほしいと。そのためにやっぱりいろんな本も出たり、地域の活動がこうやって、こういうシンポジウムもそうですけども、活発になってくるといいかなあとというふうに思ってますんで、ぜひ応援していただいて。千葉氏のところも、かなり今、千葉市長が私に何度も来ましたけども、これ、もっと苦しいんじゃないかという話をしておりました。」

滝川氏 「ありがとうございます。まだまだお聞きしたいことがあるんですが。ここで会場の人に意見を、意見というか質問コーナーを作りませんで。ここに入ってるのを少し。ちよつと見当たらないですね。里見家が伯耆倉吉に流されたのは何故ですか？わかりません。わかりませんが、そのことについては近々、里見家滅亡という本を書く予定ですので、そこで読んでいただければというふうに思っております。それでは会場の人からの意見を聞きたいと思えます。じゃあ



お願いします。何か質問でもいいですし、意見でもいいし、聞きたいことでもいいですし、お願いします。あ、はい。」

アイザワ氏 「白子町から来ましたアイザワと申します。昨年ちょうど大学生だったんですけど、千葉氏で卒論を書いてたもので、ちよつとお二方から、もし千葉氏で大河ドラマを作るならどのようなことを思い描くのかなっていうのと、私、大学は立正大学でして、お二方が同じ大河ドラマを作った際に風俗考証が佐多先生だったと思うんですけども、佐多先生とのエピソードがあったのか、もしくは時代考証と風俗考証の擦り合わせとかあったのかを教えてくださいと嬉しいです。よろしくお願いします。」

黒田氏 「千葉氏は傑出してる人いなので難しいんじゃないですかね。ちよつと地味すぎですよ。佐多さんとは、もう考証会議は同席して、時代考証と風俗考証が同席して進めていきますので、仲良くやっていきます。」

柴氏 「千葉氏なんですけども、私もどこを取り上げればいいのかよくわかりません。で、仮にやっぱり大河って今でも四十八回ですので、その四十八回をできる話として千葉氏でできるかなというのが今のところの状況かなと。それがやっぱり今後、千葉氏でやりたいならば千葉氏の研究が進んでいくこと、より進んでいくことが必要なんじゃないかなというふうに思います。あと、佐多先生ですが、佐多先生は今、黒田さんが言われたように時代考証会議でいつもとりあえずお会いしています。それで、そこで色々、セリフのなかでも色々出てくることあるんですけども、そういったところで佐多先生から指摘いただくということがあって、それで台本をより良いものにしていってるとい状況です。」

滝川氏

「はい。じゃあ、ほかには何かありますか。」

ナカタ氏

「千葉県木更津市から参りましたナカタと申します。本日は先生方もありがとうございます。ご報告、ご講演のなかにもありましたように羽柴秀吉及びその一族の苗字呼称についてなんですが、豊臣氏以降は一般的には豊臣っていう呼称で定着しているわけですが、先生方の御著書でよく拝見、存じ上げています。羽柴苗字っていうことですか。このへんは今後の大河ドラマ豊臣兄弟を含めてどのように提言なされるのかなと思っております。豊臣秀吉を主体とした政権については、豊臣政権その従属家を豊臣大名呼称するということでお話なされてましたけども、ドラマ上もそういったこと提言されて反映されていくのか、そのへんのご方針いかがかなと思っております。よろしくお願いいたします。」

黒田氏

「日本国民みんな豊臣じゃなくなって羽柴って呼ぶようになったら羽柴になります。まだそういう状況じゃないのでタイトルも豊臣兄弟ってなってます。だから、どの言葉を使うのかっていうのは視聴者のリテラシーの問題になりますので視聴者が理解できない言葉は使えません。あるいは引つかかってしまうような言葉は使えないので、皆さんが豊臣って普段からもう使わないうことになれば、今度の秀吉関係のドラマは羽柴でいくことになりますので、今日いらしている人はもうこれから豊臣は使わないでください。」

柴氏

「やっぱり今、言われた通りに羽柴が広まれば羽柴になってくんだらうなと思えますし、そもそも羽柴ってもともと羽柴なんですけれども、羽柴は家の苗字で豊臣は氏姓ですので、そういった意味では、これ江戸時代も、実は幕府関係とか幕府と親しい大名家とかを除くと江戸時代でも羽柴っていうのが使われていることは間違いないんです。それがいつ豊臣になったのかっていうのを今追求してるん

滝川氏

「はい、ありがとうございます。」

ナカタ氏

「どうもありがとうございます。」

滝川氏

「あと、先ほど手を挙げた方。」

イズガミ氏

「市原市から来ました。普段、椎津城のボランティアガイドをしておりますイズガミと申します。ちよつとふざけたことを聞いて皆さんに怒られちゃうかもしれないんですけど、千葉市、千葉駅の千葉に来ると千葉市郷土博物館に天守閣が立ってるんですよ。その前に多分、千葉常胤かなと思われれるあの騎馬武者の像が立っているんですけども、亥鼻の地は千葉氏の居城があったということで、あそこに郷土博物館を建てたらしいんですけども、なんで天守閣を建てちゃうかなと歴史好きの私はいつも思っていました。千葉常胤の鎌倉時代に天守閣はありませんと思うように、大河ドラマの考証をして

いてドラマ上で先ほどちよつと清洲城のことをちらつとお話していただきましたが、時代考証をなさっていてなんでこれこうかなっ

て思ったようなことって、もしありましたら裏話になりますが、こ
こだけの話でお聞かせ願えたらと思います。」

黒田氏 「でも、急に言われても思い出せないかな。真田丸で、」

滝川氏 「真田丸で猿飛佐助が出ましたよね。」

黒田氏 「あれはフィクションだからいいんです。ちよつとねハードルが高く
なっちゃうんですけど、その真田丸のときは、最初の段階で百姓も二
本差しっていうふうにお願いをして、一話二話は二本差ししていただ
いたんですが、それが助監督たちみんなには行き渡らなくて、途中
からずつと丸腰になっちゃって、最後のほうでもう一度九度山に行っ
たときにちゃんと二本差し。助監督の人に念をして、ぜひやってくれ
てというような形で二本差しにしてもらったっていう記憶はあります。」
柴氏 「基本的に映像になってみないとわからないというのが正直なところ
です。」

黒田氏 「じゃあ追加で。基本的には最後は演出の問題なので、それはそれで
やっぱりどういう演出になった、それは意味があつてそういう演出
をしているわけですから、それを楽しむ。事実ベースで知りたいとい
った場合には、大概そういう話題は歴史探偵とか知恵泉で取り上
げるようになるので、そういう場合には私出てますので、そちらを
見て、あつ、事実ベースはこうなんだと。それをこういうふうによ
ラマ化しているんだっていうふう二度楽しむということをしてい
ただければと思います。」

滝川氏 「先ほど千葉市の郷土博の話が出ましたけど、郷土博の外山さんなん
かあります。ちよつと突然ですけど。」

外山氏 「突然で驚いておりますが、千葉市立郷土博物館の外山と申します。
先に宣伝しちゃいますけど十一月八日にリニューアルオープンしま
して新しい展示になっておりますので、中身がですね、外見はイン

条氏の本拠地の小田原城をモデルにして作ろうということ、比べ
てみてください、よく似てます。それに姫路城のちよつとふりかけ
をかけたような形になってるんですけど、ただ、もう千葉市に
勤めてる人間が今更過去の大先輩とにかく言うのもなんですけど、
でもモデルにした小田原城も江戸時代の城じゃないかって言うと、
全くそういうことになっちゃうんです。こんなものでよろしいでし
うか。」

滝川氏 「ありがとうございます。それでは最後にお二方ぐらい、どなたか。」

イトウ氏 「早稲田大学三年のイトウと申します。今、文化構想学部というこ
ろに在籍していて自分のいるところって割りとマスコミ志望する方
も多いんですけど、先ほど綱島さんのNHKスタッフ内には大河ド
ラマの題材の認知度に関してちよつと引っかけたと言うか、気に
なつた部分がありまして、たとえばNHKのマスコミって早稲田と
あとは慶応あとはたまに東大とかの文学部の人が多いのかなって
いう偏見と言うか印象を抱いてたんですけど、そういったなかにも日
本史を専攻した方っていうのはあんまり入って来られないんでし
うか？ああ、お願いします。じゃあ綱島さんをお願いします。」

綱島氏 「いや、たまたま私も早稲田大学の文学部なんですけど、いや別に入
ってくるんじゃないですか、普通に。すいません、ぜひ入ってください。
よろしくお願いします。」

イトウ氏 「ありがとうございます。」

ヤマグチ氏 「平塚市から参りましたヤマグチと申します。二つ質問あるんですけ
ども、今まで『豊臣兄弟！』も含めて時代考証を担当されたことで、
ご研究されてきてそのなかで一番驚いた発見はなんでしようか？あ
と『豊臣兄弟！』のなかでこれだけは絶対に譲れない史実通りに表
現してほしい事柄はなんでしようか？お願いします。」

チキナ城のままなんですけれども、中身の展示のほうはリニューアル

して新たにしましたので、ぜひご覧になっていただければと思
います。実は郷土博物館は約五十年前に千葉市郷土館という観光施設
としてオープンしてるんですね。だからある程度お年を召した方は
五階にいろんな売店があったとか、プラネタリウムもあったし、そ
ういったあくまでも観光施設としてオープンしたので、あくまでも
千葉市の高度成長期の千葉市の観光のシンボルとして作られたんで
すね。それでそのところに千葉市の大市長として今でも名は高いん
ですけど、名物市長だった宮内三朗さんという人がシンボルとして
天守閣作ろうぜみたいな感じで、ちよつと高度成長期って非常に全
国各地でコンクリートの天守閣を復元と称して作るのが流行ったん
ですね。その波に乗ってああいう形になったと。ただ、それからさ
つき質問でもありましたけど、いわゆる亥鼻山の今郷土博物館が建
っている台地上って城跡です。城跡ですけど戦国時代の城跡で、いわ
ゆる千葉常胤とか鎌倉時代の城跡ではないんですね。鎌倉時代はあ
そこにおそらく宗教的な空間が広がっていて、いよいよ戦とかな
れば立て籠もるってことはあるでしょうけれども、普段は下の低地
部分に住んでいたっていうことが最近の研究でわかってきています。
ですが、その当時のつまり五十年ぐらい前の研究レベルでは、や
ぱりあそこが千葉常胤の時代の城だったっていうふうみんな思っ
てたんですね。で、作ってしまった。ただ、やはりその当時でもさ
すがに天守閣はないだろうっていう話になっていて、そこでじゃあ
どうしよう、どこモデルにしようって言ったときに、今日お二方の
先生からありましたけど、千葉氏は戦国末期に小田原北条と組ん
で、豊臣秀吉と、あつ、失礼しました、羽柴秀吉と戦うんですけ
れども、そういうこともあつて、じゃあ千葉氏と結んでいた小田原北

黒田氏

「色々な発見っていうのは調べていくなかであるんですけど、その都
度びつくりしているのが覚えきれない、ですかね。まあでも、ドラ
マ的にヒットだったのは真田丸のときに、真田信繁が秀吉の馬廻衆
だつていうことを見つけたことですね。それはもう制作側も把握し
てなくて、ほかの時代考証も把握してなかったんですけど。まあ
たまたま私が認識をして、当初は石田三成の居候っていう形で最後
まで設定していこうっていうふうになったんですけど、秀吉の馬廻
だつていうんで、そういう面倒くさい設定は必要なくなつて、もう
直に秀吉と会話できる立場になりました。それがやっぱりドラマを
より良くして、これはもう本当にね、ドラマスタッフからも感謝さ
れたんですけど、やっぱりああいう設定になったからこそ最後やつぱ
り信繁は帰ってこざるを得ないなっていう流れになったということ
ですね。あれはやつぱり私のなかでは満塁ホームランと思つてます。
で、今回は大体、設定は意向通りって言うか、我々の見解を踏まえ
て設定いただいているので、まあ全く違うっていう展開をする場合
もありますけど、それはもうわざとなので、特にないですよね、今
回ね。」

柴氏

「ないです。私も発見って言うのは、ほとんどそれぞれがやってるう
ちに発見になっていくので、『豊臣兄弟！』で言えばやつぱり秀吉と
いう人物、わかっているようで、『どうする家康』にも出てますから、
わかっているようでも実はわかっていたことがわかってきた、そ
と、秀吉がいてこそ豊臣政権なんだとかいうことがわかってきた、そ
ういうところがありますし。ミスではあるんですけど、『どうする家康』
のときは小牧長久手の合戦のときって秀吉って長久手の合戦で負けた
とき、秀吉の傍にいますんですけれども、あれ実際はいないんですよ。
まあそういう過ちなども確認できたかなっていうところがあります。」

す。今回見て注目してほしいっていうことだと思うんですが、特に全体的にやっぱり秀長という視点を通じて、色々またこれまでと違ったところが描かれていると思いますので、そういうところに注目していただければなというふうに思います。要するに脚本家さんが書いたところはそのまま残っているところがありますけれども、そのなかでも今の研究なども取り入れたところがあるので、そういうところに注目していただければなというふうに思います。」

滝川氏 「はい、ありがとうございます。話は尽きないんですが、以上で質問のほうは終わりにしまして、来年の大河ドラマ『豊臣兄弟!』、羽柴兄弟じゃなくて豊臣兄弟ですね、楽しみにしております。それは壇上の黒田さん、柴さんのお二人とNHKの綱島さんに今一度盛大な拍手をお願いします。」

綱島氏 「すみません、ちょっとだけ宣伝だけ。NHKの番組宣伝。今あった通り、『豊臣兄弟!』が始まりまして、今実はちよつと遠いんですけども名古屋ですね、一月四日曜日、名古屋愛知県芸術劇場大ホールでパブリックビューイング第一回放送を、パブリックビューイングを行います。その会場に中野太賀さんとか浜辺美波さん、宮澤エマさん等、かなり豪華出演人が来ますので、十一月二十四日までの申し込みになっておりますので、ぜひ名古屋ちよつと遠いですけども出演者の方もですね、皆さん来ますので申し込みただいて見に来ていただければと思いますのでよろしくお願いします。以上です。」

滝川氏 「はい。それでは本場に終わりにします。」

木下氏 「ありがとうございます。以上をもちまして終了となります。三つ折りのアンケートにつきましては会場前方、カゴを持っているスタッフにご提出ください。なお、QRコードでのアンケート回答もできますのでご協力お願いいたします。会場入口付近で書籍の販売まだ行っ

閉会あいさつ

成松恭平（敬愛大学 副学長）

大変楽しい一時を送らせていただきました。この雰囲気をお持ち帰りいただければと思っているのに最後に締め挨拶をするとグツと皆さんの気持ち花落ちちゃうんじゃないかと思って、やらなくていいんじゃないかなというふうに頗る不安でございますが、少しお話をさせていただけます。

学長が最初にお話したようなお話になりますので、千葉敬愛学園創立100周年記念事業歴史シリーズII、講演会の閉会にあたりまして、一言御礼の挨拶を申し上げます。まずは多くの皆様にお集まりいただきましたこと、そして長時間に渡りましてご熱心にご聴講いただきましたこと、誠にありがとうございます。今回の講演会につきましては定員三百五十名を予定していましたが、しかしその関心度が高く、定員の倍近い応募者がありました。喜ばしいことではありましたが、都合やむなく会場にお運びいただける方を抽選とさせていただきます。応募いただきました方全員にご入場いただければよかったのですが、今回ご入場いただけなかった方々には大変申し訳なく思っております。お詫びを申し上げます。次善の策として抽選に漏れた方にも今回の講演がご視聴できるようにと隣の校舎に中継ではあります、スクリーン画面でご覧いただけるようにいたしました。この会場の方々そして中継によりスクリーン画面でご視聴の方々、大変お疲れ様でございます。またご登壇いただきました黒田基樹先生、柴裕之先生のお二方には戦国時代の房総にまつわる大変興味深いお話をいただき、本日の講演会を非常に有意義なものとしていただきました。加えてお二方には本学の滝川教授のコーディネートによる座談会、NHK大河ドラマで語ろうのパネラーとしても入っていただきました。皆様からの熱いご質問もたくさんありまして、本当に改めまして心より御礼を申し上げます次第で

ておりますので、ぜひご利用ください。来年度も歴史シリーズ講演会IIIを予定しておりますので、ぜひご期待ください。本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。お忘れ物にご注意いただき、気を付けてお帰りください。ありがとうございました。」

でございます。どうもありがとうございます。また、この座談会に開催するにあたって急遽駆けつけていただいたNHKの綱島様より一言ご挨拶、宣伝を兼ねていただきましたが、誠にありがとうございました。

千葉敬愛学園は来年二〇二六年に創立100周年を迎えることとなります。房総戦国時代の終焉と秀吉、家康、千葉氏、里見氏、房総諸氏の運命、と題した今回の講演会は前回に続く100周年に向けたシリーズ第二回目として開催をしたものです。くしくも二〇二六年はここ千葉氏による千葉開府九百年にあたり節目の年でもあります。本日の講演会テーマにつきましても非常に時と場所を得たものであったと考えているところがございます。多くの方々にご満足をいただける講演会だったのでないでしょうか。また学園としましても、今日あることについて地域の皆様方に支えられた百年だったと思いを新たにしたいところがございます。

最後になりましたが、今回の開催にあたりましてご後援をいただきました千葉県教育委員会、千葉市、千葉市教育委員会、里見氏研究会、特に里見氏研究会の皆様には不慣れな私たちの会場運営に多くの協力をしてくださいました。ありがとうございます。とは言え、もし運営面で皆様にご不快を与えたならば全て私の責任でございます。不行き届の点はご寛恕いただければ望外の幸です。来年もう一回講演会を予定しています。次はさらにお気に召すよう努めます。来年もまた皆様にお会いできることを楽しみにしております。それまでこれから多くの皆様にご感謝を申し上げて閉会の挨拶とさせていただきます。長時間に渡り、どうもありがとうございました。

